平成 29 年度
会津大学文化研究センター・
會津稽古堂 協働公開セミナー
「働く」ことを考える
公開セミナー報告

－ 県民カレッジ連携講座 －

平成29年度 会津大学文化研究センター・會津稽古堂 協働公開セミナー

「働く」ことを考える

就職を支援する現場、大学を卒業して仕事をしている先輩から話を聞き、大学で学んだことが、どう仕事で役立つのかを考えていきます。

「学校で学んだことが、どう社会に活かされるのでしょうか？」

「いま社会で、どういう人材が必要とされているのでしょうか？」

開催日時　：2017年12月16日（土）
：午後1:00 – 4:00

開催場所　：会津大学講義棟M4教室

◆コーディネーター

・青木滋之（会津大学文化研究センター上級准教授）

・南雲誠（会津若松市生涯学習総合センター主任主事）

◆シンポジスト
・山岸由季（会津若松市商工課主任主事）
・白井隼人（会津若松市人事課主任主事）
・佐野昌利（会津大学学生課キャリアデザインコーディネータ）
・藤井淳（会津若松市情報政策課主任主事）
・光永祐司（会津大学グローバル推進本部准教授）

※広報窓口
会津大学事務局企画連携課計画広報係　TEL：0242-37-2510

会津大学文化研究センター・
會津稽古堂
協働公開セミナー
「働く」ことを考える

はじめに

コーディネーター　青木　滋之

文化研究センターと會津稽古堂の協働による、公開セミナーが 2017 年 12 月 16 日に、本学の講義棟 M4 教室において開催されました。

今回の“協働”に至った背景として、ここ数年での公開セミナーにおける集客力の減少及び逼迫感が挙げられます。会津大学は建学以来、地域貢献を謳ってきた大学ではありますが、公開セミナーでは、なかなか一般市民からの参加が見込めず、文化研究センター単独での公開セミナーから脱して、他の組織との連携が模索されました。そこで、以前から「会津まちなかキャンパス」の試みとして、本学の Super Global University 枠での「会津の歴史と文化」や、教養科目においてコラボレーションを行ってきた会津生涯学習総合センター（通称：會津稽古堂）との協働開催、という運びになりました。企画の段階から、会津大学と稽古堂のスタッフが話し合いを行い、地元の高校を訪問するなど、地道な活動を行ってきました。

今回の公開セミナーで登壇頂いたのは、会津若松市商工課の山岸由季様、人事課の白井隼人様、情報政策課の藤井淳様ほか、会津大学からは学生課キャリアデザインコーディネータの佐野昌利先生、グローバル推進本部の光永祐司先生です。当日の発表スライドは、文化研究センターの『研究年報』のコーナーから読むことができます。また、＜自由討論＞にもありますように、それぞれの立場から率直かつユーモアある応答が繰り広げられ、会津地方で働くことを色んな側面から掘り下げることができたと思います。また、その成果をこうして『研究年報』に収め記録できたことを、嬉しく思います。

人口減少による過疎化と、若者の首都圏流出というダブルパンチで、会津といった地方都市で「働く」ことは、益々困難になっていくように思われがちですが、今回のセミナーを通じて、気概ある意見や将来への明るい展望が参加者の口々から発せられたことは、大変頼もしいものであると感じられることでしょう。この公開セミナーの記録が、「働く」ことを考えていく礎になることができれば幸いです。

＜自由討論＞

2017 年 12 月 16 日

青木：これからは自由に、フリーディスカッションに入りたいと思います。まずは登壇された５名の方の間で、お互い「ここ、どうなのよ？」とか、「本当は、こうなんじゃないの？」っていろいろこう、突っ込みどころがあるかもしれませんので、それでちょっと質問して頂いた後に、フロアに戻すという形にしたいと思います。山岸さん、よろしいですか？　特定の方、何とかさんって指名して頂けるといいかもしれません。お願いします。

山岸：質問なんですけども、佐野さんにお聞きしたいと思います。会津大学生の進路で、２８年度のデータが出ていて、県内がだいぶ低い状況になっていると思うんですけど。そもそも会津大生は、県内とか会津の企業は眼中にないのかと…。

一同：(笑)

山岸：外を見ているかっていうところが、気になったので。分かれば、お答え頂ければと思います。

佐野：はい、分かりました。お答えします。結果として県内、地元というのが３割で、首都圏が７割という、これは結果であります。で、実際はですね、だから会津、福島県っていうのが地元の内でも多いんですが。これは、実際は案外、福島県で働きたいという方が多いです、正直なところ言うと。４０～５０人くらいは、出来れば働きたい、という感じではありまして。だから具体的に、一番最後に記載しておりますが、こういう最終的にはどこの会社という、同定しないといけないわけなんですね。起業しない以外は。そうすると、「どこが」という事が、そこの理解が、勉強不足という事が［首都圏に就職する会津大生が］多い理由の一つになっています。

だから眼中にない、というのではなくて、いろんな、皆さん人生いろいろ事情があります。お父さんお母さんが体が御不自由であったりとか、あるいはいろいろな諸事情でしばらく、福島県内だったら大丈夫と。福島県って、広いですけど。あの別に、会津・中通り・浜通りという、そこまで限定してる人も、あまりなかったり、というのはあります。

で、そういう意味で、［地元で働きたいという学生は］実際は多いんです。が、先ほどお話で、ＰＲの仕方がちょっとイマイチだという事の話が山内様よりあったと思いますが、確かにそれはですね、以前、福島県の情報産業協会というところでお話をさせて頂いた時にも同じく、ちょっと感じたことがあります。

「見せ方」というのが結構、重要で。暮らしという事になりますと特に高校生の皆さんから見たら、暮らしって、お金で言うと分かりやすいので。「可処分所得」という言い方があります。一見、東京で働くと、例えば７００万円位の年収があったとする。３０歳ぐらいでですね。東京７００万だとすると、会津だと５００万位に案外、なってたりする可能性があるんですね。

で、それで「２００万違うんですか？」と。だけど、可処分所得、つまり住宅費が馬鹿みたいに高かったり。食費も高かったり。で、自分の好きな、耕す、家庭菜園とかするような土地もなかったり。で、地獄のラッシュアワーが首都圏で一番ひどいですよ。

で、私３０数年、いつも行ってましたからね。人込みを避けるために、朝早く行って。朝５時に起きて、帰ってくるの夜の１時、そういうアホな生活をずっとやってたんですけども。そういう生活で、だから収入は確かにいいです。相当良かったかもしれませんが、人生の中で良くよーく考えてみたら、会津で暮らしてた方が、本当にいい。今こう［会津に］いますから、みんな三世代と一緒にいるんですが、子供達や孫たちと話してて、「ああ最初からこういうところが、こういう生き方があったんだ」と本当に私、思います。

だから生き方というのは、いろいろ選ぶことが、確かに出来ます。だから多少調べておくと、いろんなことがあると。で、例えばＩＣＴ、会津大学はＩＣＴの大学だから、起業してる人達が案外いるんですけどね。それ以外にもメーカーもいろいろあるという事ですから、少しでも調べて頂くと［良いということを］お伝えしたい。

青木：ありがとうございました。白井様、お願いします。

白井：では、私から光永先生にお聞きしたいと思います。御経歴の中で、まず会津大学を卒業されて、みずほ情報総研の方に入社され、それからザベリオ学園。そこからまた、会津大学のところに就任されたという風にありますけども。それぞれというか、経歴を重ねる中で、当然採用とか選考ということで入られたと思うんですが、ご自身で、何て言うかこう、採用の中で、どういうところが評価されたというか、どういうところでもって、入社されていると認識されているのか。あわよくば、それが大学でどういう風に培われたのかとか、これまでの経験でお答えいただければと思います。

光永：えーと、まず最初にですね、富士総合研究所に新人として入った時、私以外のほとんどの人が専門外だったんですね。で、私に最初から求められていたのは、即戦力だったことは間違いないと思います。それで、技術の一番先を行っている部署に配属されまして、そういった事が理由です。

あと採用の時にですね、私、実はその、普通の企業説明会で回っていた時に、一人だけちょっと呼び出されまして。(笑)

一同：(笑)

光永：一次選考通った段階で呼び出されまして。まあ「もう内定出すから。指定校取って」という話がありました。当時私が、ＷＥＢ関係とかＣＳ系［クライアント・サーバー系］をやってきたという経験から、その当時の既存のホスト系エンジニアを、ＷＥＢ系エンジニアに転属させる業務に配属したいというのがあったんだと、今振り返ってみて推測しています。

もう一つ、ザベリオ学園の方はですね、これは、私がその、時間講師やっていた時に、その時にそれなりに真面目そうだった、というだけだと思うんです。はっきり言えば。(笑)

一同：(笑)

光永：私は全然違うところがあって、やっぱりその、会津大学と一緒に何か出来るのではないかという野望ですね。(笑)　あとは、私は埼玉の南東部だったんですけど、春日部というところで、山も川も、海も何もないところで。そこに行くのに３時間かかるということで、ここは２０分で大抵、自然に行くことが出来ますので、そういったところが良かったのかなあ、という風に思っています。

で、何で、次に会津大学なんだっていうところが、意味わからないと思うんです。私は、人材育成をずっとやってきたところがありました。特にザベリオ学園で、探究学習指導と課外活動振興を、かなりやってきたことがありまして。つまり一般入試で入れない子とかを、ＡＯ推薦入試で何とか大学入れるにはどうしたらいいのかとかいう風な事を、そういうところを特にやってました。そういったところで、課外活動振興というところがやはり、評価されたと、勝手に思い込んでいます。はい、以上です。

青木：ありがとうございます。

佐野：じゃ私の方からということで、会津若松市の人事課の白井さんの方にお聞きしたいと思います。で、銀行におられたという事で。ちょうど今、今日来られてる方々は女性の方で、銀行を案外を志望されてる人が多いんじゃないかと。例えば会津大学とかだと、東邦銀行とか福島銀行とか、そういうところに毎年だいたい１人ぐらいは行くわけです。

銀行は、昔の銀行と今の銀行、都市銀行と地方銀行でいろいろ色彩は違うんですが、会津の場合は東京三菱とか、東邦銀行という何でもかんでもやってるのと、いろいろ違うのかもしれません。

で、そこでの経験、いろいろあると思いますが、基本的に一般の人達が思う事と、ちょっとやや違うのは、昔までの銀行というのは、どちらかというと貸出残高を競うという、いわゆる営業競争をするんですよ。入ったら、こうやって貸出残高の、で、これでこうやってグラフを描いてそれで勝ち負けで、これで競う。それが昔多かった。それとあと、土地を担保にして、お金を貸し出すという、それぐらいしかあまりなかったのが、最近、企業コンサルやったり、産業連携・企業連携して事業計画を良く見ながら融資していくと。そういう風に段々変わってきている…はず、なんですが。

だけど銀行は、その辺はどんな感じ何でしょう？　都市銀行って、都市銀行も確かに、私のいた三菱の関係も、お公家集団でしたから、いい所と悪い所といろいろありますが。その辺、どんな感じだったんですか？

白井：あの、はい。私が銀行に入った時は、ちょうどリーマンショックがあった年でして。先程言ったその、コンサルティング的な部門っていうのは、特に、本当に何もなかった時代。信用保証協会という組織があって、いわば福祉的にといいますか、「この会社を潰さないために」という事で、その企業を成長させ

るためにっていうよりは、潰さないために融資をする、ということが主だった時代だったんです。

で、何故、銀行をやめたのかという、そうした質問で宜しいですか？　お答えしますと、２つありまして。１つはその、自分の働くスタイルっていうのが合わなかったのかな、というのが１つと。もう１つは、裏表になっちゃうんですけども、「やりたい事は、これではないな」っていう風に思った事です。

１つ、働きやすさのスタイルというところで言うと、私は会津出身で東京に行って、東京で銀行勤めをしたんですけども、まず通勤が 1 時間位かかるんですね。満員電車の中を 2 時間往復する、という事になります。銀行は基本的にあの、すべての銀行そうじゃないかもしれないんですけど、あまり支店の近くに家は持てないんです。なぜなら、悪い事するかもしれないから。(笑)

一同：(笑)

白井：というルールがあって。(笑)　寮というのは、基本的には、各支店からちょっと遠方のところに配置する事が多かったんですね。今はどうか分かりませんけど。という事もあって、つらかったですね。あと単純にその、支店の中の人間関係的な問題とか、いろいろとその、やっぱりつらいところがあったんです。スタイルということで言うと、結構その、自分のやりたい、働きやすい環境ではないな、というのがあったと。

２つ目の、やりたい、自分の本当にやりたい事はここではないと思ったっていうのは、そもそも私が銀行に入ったのは、基本的に不動産業務をやりたかったんですね。私は農学部なんですけど、基本的に専門は都市計画といって、街づくりをやりたかったんです。いろいろ、不動産関係の資格は持ってるんですけど。

で、銀行も不動産部門ってあって、ぜひ、それで力を貸してくれという風に言われたんですけど。もちろん各支店で、最初は「ここの配属です」って入ったはいいんですが、やっぱりこれはちょっと、将来的にもなかなか自分の思い描いていたようではないな、という風に思った時に、やっぱり転職をしたいな、と思ったんです。

で、人生って一度きりなので、じゃ自分がやりたい事をやれる仕事って何だろうかなって思った時に、会津若松のやっぱり街、が思い浮かんだ。不動産をそもそも志したのも、会津若松に、あの神明通りっていう町がありますね。皆さん、多分分かると思うんですけど。神明通りっていう町は、私が小さい頃は、とっても賑やかだったんですよ。パチンコ屋とかもあって、長崎屋という、デパートではないですけど、スーパーですかね、中合というのがあって、かなり人が多かったんです。

それが段々段々少なくなって、今はまあ、こういう状態になってるっていうのが、自分の母親が段々腰曲がって白髪が増えて、っていう風な、寂しさを覚えて、それから街づくりに興味を持ったと。そう考えると、やっぱり原点は会津若松の神明通りにあるので、やっぱり市役所の職員になりたいなといって、なったというところです。

ただ、ここまで言ってますけども、銀行を何と言うか、ディスってるというか。(笑)　あの、全否定して

いるわけでは、全くなくて。たまたま、やっぱり私のやりたいことを整理してみたら、最初からここではなかったな、という風に着地した、ということです。はい。

藤井：じゃ、私から質問させて頂ければと思います。その前に、結構皆さん、大変だった事とか、こっち帰って来た時の話の中で、満員電車ってあるんですが、結構重要で。通勤快速とか乗ると、本当に息が出来ないくらい。たぶんまだ乗った事ない…若い方は乗った事ないと思いますけど、本当に気をつけてください。(笑)

一同：(笑)

藤井：で、質問に入るんですけども、光永先生に質問させて頂きたいなと思いまして。ザベリオ学園では高校生を見てきたということで。今、大学では大学生を見ている。で、総研にいた頃には大人を見てきたということで、結構いろんな世代の方をご覧になってきたと思うんですけども。

みなさん共通して…だと大変ありがたいんですけど、共通してこう、どういう資質を持っていると、能力を伸ばしていくとか、すごく活躍しているという感じになるのかなと。そういった、要素の部分が、もし、こういったところが大事なんだっていう事があれば、ぜひアドバイスして頂ければなという風に思います。

光永：これ結構大切なご質問なのかな、という風に思っているんですが。やっぱり、これからの社会で、本当に有用とされている人っていうのは、ただ単に覚えるっていうだけじゃなくてですね。やっぱりこう、相手の言ってることを汲み取って、そして自分達でその中で考えを持って、判断して、それを相手に伝える力だと思うんですね。

やっぱり伸びる人っていうのは、共通して言えるのは、使う意志があると言いますか、社会に対してどういう風にやっていくのか、という、その意志があるかどうかだと思いますね。特にあの、顕著に表れていたのが、富士総合研究所時代ですけど、私はプロパーだったわけですが、親会社から出向して来てる人を教えるのがちょっと、難しいっていいますか、非常に抵抗あったんですね。結局、私がこう、指導しても、ちゃんと捉えてもらえない。何か、「何で、この人に教わってるの？」みたいな人がやっぱり、いたんですね。

そういう人は、理解する意志もなければ、「じゃ、何で派遣されてきてるのこの人！？」っていう事がちょっと、あったんですけど。逆に、少しでも［やってみよう］って思ってる人は、ただ講義受けるだけじゃなくて、「光永さんから教わったＵＲＬ、昨日見たんですよ！　そこでちょっと分からないところがあって」という風な形での食い下がりがあってですね。

そういったところでやっぱり、興味があるかないか、そして生かしていこうという気持ちがやっぱり、成功に繋がっていっているのかなと思います。やはり何のためにやっているのかも、受け身だと漫然と受けていては、やっぱり全然力もつきませんし、やっぱり面白いなと思う事が大切かなと。

青木：じゃ、質問をお願いします。

光永：引き続いてすみません、私は山岸さんに質問したい事があります。都会出たい、っていう、そういう人は当然ながら出て、その気持ちを止める事は出来ないっていうのは、まあそうなんですね。けれど、これから会津が栄えていくためには、都会に出たいという人が多過ぎるというところも確かに問題ではあるんですけど。会津に生きたい、という魅力を共有できる場というのが必要になってくるのかなっていう風に思ってるんですが。その共有するための試みとして、何か会津若松市でされているとか、今後されていく予定あるかなということを、ちょっとお伺いしたいと思っています。

山岸：はい。共有できる取組ということだったんですけども、商工課のイベントではないんですけども、市役所の地域作り課というところで、移住者向けのツアーであったり、イベントなんていうのも開催しているところで。宿泊をして、次回なんですけど、ちょうど「会津で仕事を探そう」みたいなイベントやりまして、２月３日の就職フェアと合わせて、東京の方からツアーでやって来るということで。会津の雪を体験したり、仕事を見てみたりという事で、会津の…実際に住んでみて、実際に体験して、移住を決めてもらうようなイベント、なんていうのも今やっていたり、します。

白井：人事課も、ちょっと…。(笑)

一同：(笑)

白井：人事課もちょっと、取り組みをしているので、紹介したいと思います。あの、商工課も一緒だったんですね、リクルートという会社がありまして、それと人事課と、商工課も今度加わってくれるんですけど。会津、首都圏とか仙台とか新潟とか、やっぱり高校生は大学進学すると大体その辺に行くという問題があって。それが戻ってこない、という事に対して、いろんな…市役所も、会津の民間企業も、必死に合同説明会を東京とかいろんなところで開催して、会津で生活するという事の魅力をアピールしているというようなことで今進めていて。

やっぱり高校生が都会に出たいっていうのは､おそらく､いろんなアンケートを私取っているんですけど、スターバックスがないとか、映画館がないとか、ディズニーランドが無いとか、そういうところに尽きると思うんですね。やっぱり楽しさというか、刺激がないっていう。

一方で会津にしかない魅力というのも当然あるので。私さっき趣味で、ロコミを残してるって言ってますけど、これも実はそういう目的もあって。学生達に対して、会津で就職することで…会津に就職することイコール会津で生活する事になりますから、職場として魅力はあっても、生活する場が魅力がないと、結局は戻ってきてくれないので。生活する場の魅力起こしというか、魅力のＰＲを今、リクルートやら地域づくり課や商工課と一緒に、練って、合わせてその、ＰＲをしようと企んでおります。以上です。

青木：ありがとうございました。じゃ、これからフロアにお渡ししまして、質問・コメント何でもいいので。お考えある方いましたら、挙手をお願いしたいと思います。マイクを持っていきます。よろしくお願いします、どなたかいらっしゃいますか？　…高校生のみなさん、どうですか？

一同：(笑)

青木：みんなが注目してます。(笑)　はい、質問ございますか？　あ、はい、やりたそうな顔してます。(笑)

一同：(笑)

高校生Ａ：(笑) あの、個人的な興味の話になってしまうんですけど。私すごい、「地方創生」に興味があって。将来会津のために、こう、働きたいなって思ってるんですけど。

一回、都会に出て、都会から、別の場所から、会津を見たいっていう気持ちも持ってるんですよ。その、地方創生とかにおいて、会津の魅力っていうのは、他の地方創生をやってる都市に比べて、会津にしかない魅力というのは、どういったものがありますか？

青木：どなたに聞きたいですか？　全員に？

高校生Ａ：地方創生に関わる…。

青木：そう、みんな地方創生だね。(笑)

一同：(笑)

青木：じゃ、市役所側と大学側と一人ずつ。まず、藤井さんから。

藤井：補足とかあったら、他の職員から突っ込みを入れてもらうと。(笑)

一同：(笑)

藤井：私からお話をさせて頂きたいと思います。そもそも地方創生って何なのかな？っていう話から始まるんですが。平たく、ざっくり言って、地域が活性化することなのかなという風に思うんですが。この時に重要なのって、市役所職員が頑張ればいいのかっていうと、ちょっと違うと思います。で、市民が頑張ればいいのかっていうと、それもまたちょっと違うと思うんです。

いろんな、こう…例えば市の職員だったりだとか、市民の方々ですとか、大学の先生だったりとか、学生さん達がそれぞれ、自分が、自分の街に住んでいて、この地域を活性化するんだっていう、あるいは良くしていくんだっていう風な、自分から動いていくっていう意志で、いろんな活動をしていく、っていうのが、一つ地方創生の…いわゆる地方創生の大事な事だなと思っています。

最近ちょっと見た記事でいいのがあって。ちょっと例示として出させて頂きます。ある企業の方が、ちょっと寂れてる地域に行って、「こんな観光のプラン作りました」と。こんな風に遊歩道とかを作って、こん

な感じで勧誘していって、じゃ最終的にここに、景色のいいところに誘導して、観光客を増やしましょう、っていうプランを立てたわけですね。それを住民と役所の説明会で提案した。市民の方は手を上げて言いました。

「素晴らしいプランですね！ で、誰がやるんですか？」

一同：ああ…。

藤井：で、市民の方は「市民の皆さんが協力してください」って言うと「えーっ」っていう感じで。で、市民の方がどうだったかっていうと、今度は役所の方を向くんですね。「これ、役所でやるんでしょ？」 役所の担当者も、「いやいや、役所では」みたいな感じになるんですね。

大事な事が何かっていうと、いろんな、多分みなさん個人の中にもあるし、企業の中にもいろんな地方創生とか活性化するプランって眠っているはずなんです。いろんなアイディアがあると思うんですが、実行する主体がいなければ、絶対それって実現しない。

会津若松市のいいところっていうのは、市役所の職員はもちろん地方創生とかスマートシティっていう事を掲げていて、いろんなことを、この街を活性化していこう、っていうやる気があるし。市民の方も、いろんな市民団体があって、盛んに活動されている。

私、山口から来たので、結構会津で個人間の繋がりとか、いろんな活動されてる方ってすごく多いな、って比較して思うんですけども。いろんな主体が、自分達の意志で活動している。あとは、大学でも、大学の学生さん達もいろんな活動してらっしゃるし。先生方も地域貢献の活動とか、講義なんかをされてらっしゃる。あるいは、多分皆さん参加されてた方も、もしかしたら高校生の中にいらっしゃるかもしれませんが、例えばアプリ開発とか、ＶＲとかロボットとか、いろんなものを開発するような講義を大学でやったりしていて。

いろんな方が、自分達の地域を面白くしようっていう風に動いてる割合が、会津はものすごく高いなと思います。これ、私オープンデータの関係で、まだオープンデータで結構馴染のない概念で、全国的にいろんなところでどんどん推進していこうっていう風になっているので、いろんなところでお話に行かせて頂いたり、東京でお話を聞いたりする機会があるんですけども。いろんな地域に行くと、会津はものすごく羨ましがられます。他の地域に比べて、ものすごく活発に活動してる人が多いので。そういったところは、地方創生、いわゆる地方創生における会津地域の大きなメリットかな、という風に思っています。

なので、そうした主体的に動くところっていうのは、どこまで確保できるのかっていうのがカギになるんですが、会津地域はそこがものすごく優れているなと思いますね。ただ、他のところに行って、それを実感してみて帰ってくるっていうのも、私個人としてはいいなという風に思っています。

青木：じゃあ、大学側から、佐野さんお願いします。

佐野：地方創生について、一度東京に、都会に出たいと言っている、それはその通りです。ぜひ出てください。会津だけにいる人達だけだと、全然ダメです。私も、今は北塩原村というところの、村役場の近くに住んでるんですが、そこのところは比較的、案外、東京とかの人達案外いたりとかですね、案外いろんな人達がいるんですが。

だから、一度は、結論言うと、ぜひ行った方がいいです。

地方創生っていうことは、シンクタンクで、その昔、いろいろ関わっていたんですが。手法というのと、ネタとあるわけですね。方法論、どんな事に対してもある種の方法論というのが必要なんです。方法があって、あと「何を」というテーマとかの、２つあるんですね。

方法論というのは、人が関係していますから、重要な事は合意形成という、今ちょっと話がありました。いくつか、考え方も違う、年齢も違う人達の間で、いろいろな意見を集約して、それを皆で…反対も多いんですが、特に街づくりとかでは、基本には街づくりコンサルとか、あるいは大学の先生、都市計画の先生と一緒になって、中の人達に入り込んでやるんですが、ワークショップという形で、やるんですね。

で、それが、ｗｉｔｈ／ｗｉｔｈｏｕｔ―何かをした場合としない場合、どう違うんですか、というようなことを可視化して見える化すると。だから合意形成とか、見える化とか、こういう、いわゆる社会…あの、吉良先生がいらっしゃいますから。社会シミュレーションの基本的な技術というのは、幾つか方法論があって、そういうのは、どういう専門分野であれ、いろいろ使いますので、まずはそれを勉強した方がいいです。

あとはネタ、例えばこういう会津とかだと、基本的にはここは観光と農業という、これが二つの、二大産業になっているんですね。だからこれをどう伸ばしていくか、ということで、海外展開したり、いろんなやり方があるわけですが。基本的な視点という事では、そこに住んでる人にとっては当たり前のことが、だけど、外部から来る…観光の人にとっては、ものすごく魅力的なことが多いわけです。

例えば良くあるのは、というか、会津の…普通のじいちゃん達は、当たり前やんけというのは、例えば私の実家、湯川村から会津磐梯山、むちゃくちゃ景色いいんですね。あれはもう、すばらしい。この景色という事が、いかに財産であるかという事を、理解してないわけです。だから本来、そこのところ、景色を切り取って、そこを上手にみんな集めていって、っていう事を上手にやれば、まあ人がいっぱい来るじゃろうなって、ＪＴＢも楽やなと思いますが。そういうような、いろいろな見方、っていうのもあるでしょうし。あるいは水が非常に…水と環境、がいいわけです。日本で一番いい。あの、「日本沈没」というのがありまして、あれで残ったの会津ですよ。(笑)

一同：(笑)

佐野：あそこに出てきた、たまたま私の実家の「会津娘」が出てたんですが。いやだから、会津は環境、もう素晴らしいところです。大体、今回の大雪の時でも会津はそれほどでも余りなかったり。あるいは、台風来ても、ここだけ残りますよね。だから、すごいんですよ。

ものすごい。だからそれを、まあ上手に…こんなにすごいだっていうのを、上手な見せ方がみんな下手ですから、会津の人達って朴訥［ぼくとつ］なんですよ、言い訳しない。言い訳しないのと、何も言われへんのと違うからね。そこがちょっと…もう少し上手に言えばいいのに、ああ惜しいなと思う事、いっぱいありますけど。だから、嬋嫚［たんまん］っていうのは、実はいっぱいあるわけです。

で、それと、あとは仕事という事はまた違う。仕事というのは、産業界というのは、売上とか、そこの市場性で見ます。だから、かなり…市場性ということは、新たに作り出すことと、既存の…だから既存のところを上乗せする、あるいは新しいところをクリエイトしていく、といろいろなやり方があります。

で、産業界は速いんですね。やたらと速い。アカデミアと産業界の違いは、そこにあります。だからアカデミアだと、だからそれは最近…ややシニカルな言い方をすると、産業界、やたらと速いので、そこのところ大変だから、もう学術的な事、いわゆる抽象的な事、理系的な、理学的な事をしがちなんです。

だから、役に立つ・役に立たない、という言い方はさっきもちょっとありましたが、実はこれがあまり本当は良くないのかもしれない。産業界から見たら、それが売上とか利益に貢献するかという見方をまずします。だから専門性っていうのも、市場性のない専門性というのと、市場性のある専門性というのと、実は２種類ある。［市場から見れば］もう終わっているような専門性、もあったりするんですね。その辺は、それぞれの業界とか、によってだいぶ違います。

だけど一般的な、先ほど言いました哲学であるとか、社会学、経済学とか、情報科学もそうですが、そういう全体を串刺しするようなものの見方というのは、いつの時代でも必ず役に立つ、ということになりますので、勉強頑張って頂ければなと思います。

青木：ありがとうございます。

藤井：ちなみに補足情報なんですが、女子高生が主人公の漫画で、「地方は活性化するか否か」っていうウェブ漫画があるので、そちらも興味がある方はぜひご覧いただけたら、と。

一同：(笑)

青木：ありがとうございました。質問どうですか？　あ、じゃあ、お願いします。

高校生Ｂ：私はＶＲに結構興味があって、ＶＲを使って、会津の観光業を…主にその、活性化させたいなと思っているんですけど。私最近、会津にもその、ＶＲ使ってるやつ、最近始まってるんですけど、私はそれを本当についこの間知って。私がこの間知ったっていう事は、あまりＰＲがなっていないっていうことになるかなと思うんですけど。(笑)

そこら辺、もうちょっと…私が活性化したいなって思ってるんですけど。「ＶＲを使って観光業を活性化させる」っていう仕事は、市役所の観光業の方で出来るのか、それとも会津大学在学中にＶＲの研究部で出

来るのか、ちょっと質問したいんです。出来れば市役所の方に。

青木：これは商工課でしょうね。人事ではなさそうですね。(笑)

山岸：ＶＲの件だったんですけど。隣の課の、商工課の隣の観光課というところでやっていまして。ちょくちょく私も相談受けたりしてたんですが。結構大きな…電通さんっていう会社に頼んで作成していたみたいなんでけど。聞いた情報なのであれですけど。(笑)　「本当にこれで人が集まるのか？」っていうような、このお金をかけて、本当に届いているのかっていうような内容だったんじゃないかなって。見たことありますか？　見に行きました？

高校生Ｂ：いや、見には行っていないんですけど…サイトだけ見て。でもちょっと他の地域と比べると、ちょっと「あれ？？」っていう。(笑)

一同：(笑)

山岸：だと、思います。(笑)　私もちょっと見て「ん？」っていうところがあって。なおかつ場所が、鶴ヶ城入って、おみやげ屋さんの奥のところだったりするので、なかなか人が行くようなところじゃないのかなというところで。そういう、ＶＲを使った観光業とか、ＰＲしたいっていう気持ちがある人が市役所に入ってくれると、すごくいいなって今、率直に考えたところです。(笑)

白井：あの、広報が上手くいっていないんじゃないかって、ご指摘にもあったと思うんですけど。まさにその通り、です。会津若松市役所は、やはり広報面…さっき会津人は朴訥で、というお話もあったんですけど。結構そういう風に、私自身も痛感するところがあって。職員採用の場面も、本当にそうだったんですよ。今まで全く、市政だよりで職員採用やります、ってくらいしかやってなくて。

でもあの、一般の市民の人、高校生も大学生も、リクナビって就職サイトとかを見て、スマホとかで調べてやっているので。そういった方に今はシフトして、ちゃんと採用試験をやりますよとか、市役所の魅力ってこんなものですよっていうのをＰＲするようにしています。そういう風に今、本当にすごく市民目線の、本当に貴重な意見を頂いているので、それに合わせて、市役所もどんどんどんどん改善して行って、皆さんの使いやすい市になるようにしているので、ぜひそういう意見があったらください、という事が一つと。あと、市役所の職員達としても、市民目線を持っている事って本当に大事だと思うので。自分も市民なので、ここはこうだったらいいなっていう気持ちを持って、職員になって欲しいなって思いました。(笑)

高校生Ｂ：どうもありがとうございます。(笑)

青木：藤井さんもお願いします。

藤井：ＶＲは、市役所で使うＶＲと、ＶＲ部で使うＶＲは、目的が全く違います。例えば観光課で使うＶＲは、あくまで観光客の方をたくさん集める、観光の方にたくさん来ていただく、楽しんでいただく、と

いうような目的のもとで、一つの手段としてＶＲを使っているっていうのが正直なところなので。ＶＲばかりを使うわけではないですし、それ以外の技術が必要な場合もあるし、あるいは「技術」ではないかもしれない。それはもう、泥臭いと言っていいか分からないんですけど、地道な「おもてなし」であるとか、観光にあたる方の教育であったり、ボランティアガイドとかの育成なのかもしれないですし。その中の、あくまで一つの手段でしかないんですね。

で、大学のいわゆるＶＲ部とかでやっているようなＶＲは、純粋にＶＲが好きだとか、自分で作ったやつ楽しみたいとか、コンテストに応募して１等とって賞金稼ぎたいとか、いろんな目的を持ってやっているわけで、必ずしも観光客を集めるためというわけではないので。かなり、目的っていう部分では違うと思うんです。

ただ、先ほど２人もお話していたように、例えばＶＲとか技術が分かっている方が、入るっていうのは、すごく、今まで培った技術とか経験とかが生きてくるところで。「こんなところに置いても、ＶＲ意味ねーよ！！」とか、「もっとこういう風にしないと、面白くないでしょ？」っていう、率直な意見を頂けるっていうのは、すごくいいので。大学に行ってＶＲをやりつつ、今度は市役所に入って別の目的の一つとしてＶＲを使うっていうのもありだと思います。

もちろん、ＶＲは観光だけに使えるっていうわけではなくて。こう例えば、健康とか福祉とかにも、もちろん使えるものだと思っています。なので、そういった自分が培ってきた技術っていうのは、いろんな部署とか、いろんな仕事で役に立ってくると思うので。学生でＶＲをやる時は、ぜひ、その先の事を考えるのもいいんですけど、純粋にＶＲを楽しんで頂いていいかなと思います。

青木：ありがとうございます。佐野さんお願いします。

佐野：今のＶＲで観光をという事についてですが、ものの見方ということで、ニーズ（ｎｅｅｄｓ）とシーズ（ｓｅｅｄｓ）という、この二つの見方があります。で、技術者とかはシーズ…だから今のＶＲという事での、バーチャル・リアリティとか、こういう、いろいろありますが、その辺のところでまず関心がある。それはそれでいいんですね。

でも、ニーズという事も重要だという事はちょっと言いたかったです。で、シーズという事では確かに、今ＶＲでいろいろあったように、特に最先端のやつだと、つい最近…日本マイクロソフトに数か月前に行ったんですが、そこで１００万円位のこういうディスプレイってありますね。これがまさしく、本当に今市販されている、すぐ使えるディスプレイ、ＶＲのツールです。だから、道具はもうあるんです。それで、ちょっとお金…３０万位かかったかな、確かデザニウムの社長とかもう持ってた気がするけど。(笑)

一応：(笑)

佐野：それで、ちょっと勉強してやれば出来るんですよ。だから、その辺をちょっと、誰かをちょっと上手につついて(笑)、やると、それはそれで出来るっていうのがあってですね。

で、ニーズはという、観光という話です。観光、ここがポイントです。だから例えば東山温泉とか、これを活性化させるというような事で、じゃ何が課題になっているのかと、インバウンドのあれなのか、あるいは地域の動線が悪いのかとか、そういうのがあるから、その辺のことの、関係者の…先ほど合意形成と言いましたが、課題がどういう事であるのかという事を、把握する事が重要なんですね。

で、それが元々のそれが…自業自得という、観光業者の人達の努力不足でそうなっているのか、それとも誘導の仕方、人がちょっとした街づくりのところの、道路のところのちょっとしたことをやっていないんで、そこがボトルネックになっているのかとか、いろいろあるんですが、そういう様な事をちょっといろいろやらないといけない。で、そういうのに対して、シーズとして、例えばＩＯＴを使う。まあセンサーで通信をするようなものを使うとか、位置測位機を使うとか、そういうのを…あるいは画像解析、いまどきだとディープ・ラーニングっていうのいろいろ…道具だったら今時、山のようにあるんですね。

そういうのを活用しながらやる、いわゆる最近だとサービス・サイエンスっていう格好いい言い方をするとですね。サービス・サイエンスと言ってそういうような事を総合化するようなやり方が、社会実証実験での一番…城崎っていう京都のところ辺りで一番最初、数年前から、１０年前によくやってたんですけども。そういうような形で、実際にどこかの場所で、東山温泉でもどこでもいいんですが、具体的な場所でいっしょになって、何かやると。

で、会津大学で、先生達を上手にそそのかしてですね。で、そういう人達とやるというと、先生達あるいはみなさんも新しい論文が書けますし、で、その地域自身が幸せになりますから、大変、素晴らしい事だと思いますので、期待しています。(笑)

一同：(笑)

青木：ありがとうございました。まだ質問終わってないんですけど、いかがですか？　その前に、４時終わりなんですけども、過ぎてまして、お帰りになりたい方がいましたら止められませんので…。

一同：(笑)

青木：もうちょっと質問が多分、あると思いますので、それをお聞きした方がいいと思いまして。もうちょっとだけ。…ないですか？　いいですか？　いや、聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥なので。(笑)　聞いた方がずっといいと思いますよ。「気分どうですか？」とか。(笑)

一同：(笑)

青木：何でもいいので…はい、どうぞ。

高校生Ｃ：どこに聞いていいか分からないんですけど…。

青木：ああいいですよ、大丈夫です。

高校生Ｃ：高校生が、若松のために、やりたい事があっても、今、なんかそういう…ボランティアしたいって思っても、高校生が出来る……場所があるっていうのも、良く分からないし。自分が今、南会津の史実を元にした町おこしみたいな事をやってるチームに所属してるんですけど、それも全然、あるの知らなくて。周りの人もそんなのがあるのか分からないし。

やりたいなと思っても、それを実現させる場所があっても分からないから、そういうのを分かるような機会とかが、あったらいいなと思っています。

青木：あ、はい。何かそれに関して、ヒントをお持ちの方いましたら…。

光永：ええと私、前職が高校教師なので(笑)、例えば…進路実現のために、そういう志望理由を書くためにはいろんな経験をしなくちゃいけないところがあって。そのために、やっぱり同じような質問があるんですね。「私、何したらいいんですかね？」っていうところから、「活性化させていきたいと思うんだけど、活性化って何ですか？」とか、そういったところをいろいろ聞きます。

でもやっぱり、一番なのは、とにかく一つ何かやってみると、そこで知識の角度っていうのが一つ出来るんじゃないかなという風に思います。じゃそれが何かというと、例えば会津若松市に住んでいらっしゃるのか良く分からないんですが、会津若松市に「市政だより」ってあります。その中に、いろんな生涯学習関係のご案内という形で、イベントがあったりとかします。

あと例えば、「未来人財育成」ってありますよね。高校生と中学生対象に、そういう未来人財育成プロジェクトとかあって、これは大使館とかに行ったりするものなんです。あと、国立磐梯青少年自然の家とか行くんですかね、いうものがあるんです。あれやるだけで、いきなりこう、普通の…一般的な高校生から、何かヒント、手がかりを持った人にいきなり変わるんですね。まずはああいうもの、とりあえずチャレンジしてみるとかですね。夏休みとか、５月位にやっているんですけども。そういう風な、とっかかり見つけるっていうのが一つですね。

あとはネットで調べるっていうのが一番、情報量としては多いんですけど、あとは…白書ですね。例えば環境白書って読んでみると、これ一般国民向けに書いてあるので、非常に噛み砕いていて、その小学生バージョンがあるんですけど、それを見てみると、例えば持続可能な社会って何だろうっていうところから始まって、各自治体の取り組み状況っていうのが分かるわけですね。そういうところからじゃあ、調べてみるとか、聞きに行くとかですね。

例えばザベリオにいた生徒なんかは、女川町の取り組みを知りたいっていう。実際に女川町の役場に電話したんですね。そしたら町長が「案内したい！そんなところから来るんだったら、案内したい！」って事で町長、自らが出てきて、いろいろ教えて下さって。そこでネタが収集出来たとか、そういう風な事がありますので。ぜひ、何か行動を起こすという事を考えて頂きたい。

青木：ありがとうございます。挙手がありました、では南雲さんお願いします。

南雲：本当に素晴らしいお話だったんじゃないかなって今、思いました。あの、私たち生涯学習という事で、お仕事をさせて頂いているんですけども、そういった誰かの役に立ちたいとか、誰かのために何かしてみたい、本当に小さいことから大きい事まで、いろんな活動をされている団体さんだったり、あと大人から子供まで、あります。

ぜひそういった、何かやってみたいという気持ちがありましたら、私たちが会津稽古堂におりますので、１人でも２人でもお話を聞いて、どんなことをやってみたいのかっていうのに答えられるように、私たちも一緒に考えていきたいと思いますので。もし本気でこういった事をやってみたい、いうのがありましたら、私たち稽古堂の方の１階の窓口の方にいますので、私、南雲だったりとか、荒井だったり、おりますので、私たちにご相談して頂ければ、いろんな人と連絡取ったりとか、調整して。やりたいこと全部出来るかどうかは分かりませんけど、本当に、高校生のみなさんがやりたい事のお手伝いはさせて頂きたいと思うので、そういった時は私たちにお話してくれたら嬉しいなと思います。

堀金：市役所の人間で一番年を取っていますので、一言申し上げます。市役所、いろんな人からの提案を頂けるようなシステムを持っています。例えば、市長への手紙という事で、市政だよりに年に２回、いろんな提案を頂くような、そういったものを受け付けております。

あとメールでも何でも、そういうものを頂いておりますし、あと一番手っ取り早いのはですね、月に１回市長室を解放して、市民の方に自由に来て頂いて、市長と話し合って頂く機会も設けておりますので。ぜひそういう機会を利用して、会津若松市のために何かこういう事をやりたいという思いがあれば、是非来て頂ければ。それは今度また、市の組織として、自然体で受けさせて頂いて、またご報告出来ると思いますので、ぜひそういった機会を利用して頂ければと思います。

荒井：私も会津若松市役所の生涯学習センターの人間なんですが、私、仕事とか関係なく、ちょっと皆さんにメッセージとしてお伝えしたいんですけども。今のそういった、社会教育とかそういう事関係なしに、いろいろとやっぱり経験するのって大事だと思うんです。お仕事もそうですし、趣味もそうですし。部活もそうですし、あとアルバイトでも何でもいいんですけど。

私、大学、東京の方の大学で、東京でいろいろとやっぱり遊んできたりもしたんですが。いろいろとバイト転々としました。例えば居酒屋さんもやりましたし、イベントスタッフもやりました。あとは、ラジオ局とかテレビ局、あと某、青二プロダクションという声優のプロダクションあるんですが、そこのちょっとした内部のお仕事もやりました。そういったところ、やっぱりいろいろと経験したりとか、部活なりサークルなり、趣味なりで、人の幅を広げるという事がとても大事だと思います。

であと、今、高校生とか大学生だと、正直、時間はたくさんあるので、そういった時にいっぱいやれる事とかやりたい事をやっておいた方が、こういった就職とかする時に、後々活きてくるのかなと思いますので、ぜひそういった事も参考にして頂ければと思います。以上です。

佐野：今さっきのあの、南会津という事の話がありましたが、あの南会津を拠点にした、会社というのは

具体的にあります。会津大学にも時々来るんですが、ＥWMという会社がありまして、案外、有名なんですね。会津というのと佐賀というのとで、全国の案外とＮＰＯ的な民間企業と、県、ＩＴ企業であります。

あの、完全に株式会社というのと、ＮＰＯ・ＮＧＯでもあったり、就職の選択肢って実はいろいろあります。で、昔はＮＧＯってあの、野鳥の会とか、あるいはパンダの何とか会とか、そういったところも、実は政府検定の、特に地球環境の分野だと圧倒的な力があって、今時はそういうところを逆に、大会社じゃなく、そこを目指す人も案外いたりもするんですね。

だから、そういうＮＧＯという、あるいは…ＮＰＯは案外企業と近いんです。そういう選択肢もありますし、場所に、例えば南会津を何とかしたいっていったら、そういうような会社、町おこしって、役所にやや近いんですが、そういうような会社もありますので、いくつかそういうのを調べて、やってみるという考え方もあるかと思います。

青木：はい。では大学の部署、我々の側の人間からまだ聞いてないと思いますので、よろしかったら…吉良先生どうですか？

吉良：会津大学の吉良です。実は私、本籍が山口でして、この教室の中に長州の人間がええ、４人もいると。(笑)

一同：(笑)

吉良：すごい、地域の移住とか、住むという話が話題になっていて、私もそれについて伺いたいんですけども。その、外に一度出て戻るという事は、私も凄い、いい事だと思います。で、会津にいて、私、猪苗代湖が大好きで、猪苗代湖あれだけ広くて透明度が高くて、淡水でダイビングできるところって北海道を除いて多分あそこくらいしかないと思うんですよ。そういう絶好のスポットで、東京の人達が車でわんさか来ているのに、地元の人は誰も潜らないっていう不思議な感じで、驚いているんですけど。

一度外に出て戻ってくる、とか、また外から来て定住する人というのは、どういう風なパターンの人が多いのかというので、何かご存知の方、どなたでもいいんですけど、教えて頂ければと思います。まあ、一つには自然環境がいいとか、生活費が安いとか、そういったものがあるんでしょうけど、何かほかに…特に会津大学を卒業した人で戻ってくる人、またはよそから来てずっと残る人についてあればなと思います。

というのも、会津大学６割が外から来ている人ですので、仮に７割東京に行ったとしても、県内に対する人材的なダメージですとか、ほとんどないので、それよりかは、より県内出身者の比率を上げるというのが、とても大事だと思うんですけども。何か県内で定住する人、また一度出ていって戻る人のパターンみたいなものがあれば教えて頂ければと思います。

青木：素晴らしい質問でした。ええと、これは…。はい。

光永：私、大学でこっちに来て、一回東京に就職して、戻ってきたというところであるんです。やっぱり

何にせよ、私なんか食べ物が…やっぱり好きなので。

一同：(笑)

光永：先程のグルメの評価という所で、私、一番見ているところなのかもしれないのですけれども。やっぱりこう、山菜であるとか、今まで私が経験した事のない食べ物が非常に多く、また美味しい・新鮮であるという事が、やっぱりこう…何だろ、戻ってきたきっかけの内の一つであったのは間違いないですね。

あともう一つは、いつまで経っても、いろんなお店を巡っても、まだ巡り足りないぐらいに非常に多彩な…あの、激戦区って言うんでしょうかね、そういう風な環境であって、競ってて楽しいという事ですね。私の実家の春日部はまず、ラーメン屋自体が２つ位しかないので。あと、何て言うんでしょう、有名なお菓子であるとか、おみやげであるとか、そういったものが一切ないんですね。ここ、いっぱいありますよね？　何か四季折々、いろんな物もらえたりとか、あとは買ってきたりする、これはもう実は幸せな事かなという風に勝手に思っています。

青木：他にあの、ご意見お持ちの方ありましたらお願いします。

白井：実は会津若松市職員の身寄り調査の内、今はもう、３・４割は会津若松市外からです。もちろん県外から、もちろん藤井もそうですけども、あとは大阪とか、九州も多かったり…かなり多くいらっしゃいます。彼らがなぜこっちにいるかというと、会津大学からの流れでという人ももちろんいますが、あとは、あの率直に言うと、結婚する相手が会津の人だったとかいうのは、かなり多くいます。

あともう一つは、やはり会津の歴史に非常に愛着があってというか、歴史が好きで、会津の街並みとかをこう、観光客としても来ていて、それでここで居たいなとなっているとか。

あとは、…すみません２つ目の、東京出たけど戻って来る人のパターン、私自身もそうですけど、一つ…まあ、一人一人にヒアリングしたわけではないんですが、おそらくみんな共通しているのは、一つは実家があるよ、という事が一番大きいかと思います。もう一つは、都会のライフスタイルがやはり、ちょっと合っていないのかなという人が、多いような感じですね。

あと３点目として、自分の住み慣れた町であるし、市役所に就職した人にとってはもう、モロにそうなんですけど、「この町を自分で動かしてる感」っていうのは結構あると思うんですね。東京で、大企業で勤めてると、やっぱり自分がやってる事で何かが変わるっていう、何というか認識って、ちょっと薄いというか。組織の規模が大きくなればなるほど、当然そうなるんですけど。この会津地方においては、結構…まあ、当然私もこうやってしゃべってますけど、自分がこう、やって、少しちょっと良くなっているっていう実感って、結構感じる場面が多くて。そういう、やり甲斐みたいなのもあるのかなという風に思ってます。

あとはそうですね、会津若松の場合、ものすごく辺鄙な場所という程でもないのも、ちょっと有利に働いている部分もあるのかなと思っています。

青木：よろしいですか？　じゃあ、お願いします。

藤井：吉良先生と同じく長州から来て、そのままずっと居残っちゃった立場からお話させて頂くと。ええと、私、大学の時に勉強…卒業できる程度にはしたんですけど、そんなに真面目にやってないんです。(笑)

一同：(笑)

藤井：で、何をやっていたかというと、いろんな企業でインターンやったりバイトやったりだとか、あとはボランティアサークルに入ったりだとか、あとはこれもアルバイトですけど、学童保育とかやってて。いろんなところに顔出して、地域の人とやり取りしたりしてたんですけども。

最初デザイニウムに入ったっていうお話をしたんですけど、これ IT をやりたかったからとか、ホームページをやりたかったからとかじゃなくて、「会津に残りたいから、じゃあどこを探そう」っていうような思考だったんですね。元々会津に残ると自分の中で決めてたんです。親に相談しなかったですけど。会津に残るって決めてて、じゃあどこに行こうっていうので、ハローワークに行ったり、市役所で話を聞いたり、インターン先のベンチャー企業で話を聞いて、結局デザイニウムに決めたというところがありまして。

で、その後、後輩の会津大学生と話したりすると、やっぱり大学と家の往復だけだと、なかなか愛着が持てない…地域との繋がりっていうところで、私、なんで会津に残ろうと思ったかっていうと、大学４年間で培った人脈を、東京とかに行って一気になくしちゃうっていうのが嫌だったんですね。４年間培った人脈を、このまま生かして人生生きていきたいなと思ったので、ここにいる決心をしたわけで。

その部分で、特に大学の先生の方に聞いていただければと思ったんですけど、そういった仕事との繋がりとか、人との繋がりっていうのをいろんなところで作っていくと、地域に愛着がわいて、最終的にここに残るっていう選択をする人も増えてくる。その辺りが、一つ、他のところからきて、会津に定着するっていう理由なのかなっていう風に思っています。

青木：時間３０分以上オーバーしてすみません。ここら辺でじゃあ、ディスカッション切らせて頂きたいと思います。最後のクロージングに入りたいと思います。まず、文化研究センターのセンター長・菊地先生から講評頂きたいと思います。

菊地（文化研究センター長）：講評できませんので、感想です。(笑)　誰に向かって発言するのかというと、「若い人に向かって、高いことを語る人」に向かってのコメントです。あの、良かれと思って我々、若い人に話をするんですけども、その良かれと思って話すことが、若い人にとっては足枷になることがあるんじゃないかなと思うんですね。

今日語られたことを、その通りの事なんですけども、そうじゃなくちゃいけないという風に若い人達が受けられるとすると、ちょっと申し訳ないなと思うので。「こういう事は大切だけども、でもそうじゃなくても大丈夫だよ」みたいな。藤井さんが、いろんな…ね、動機の多様性がある組織がいいんだっていう、お

話ありましたよね。

ああいう風に、動機だけでなくて、個性、能力とかそういうことも含めて、多様性のある組織の中で、お互いに助け合って生きていくべ、みたいな話も対にした方が、若い人にとってはこう、重荷にならないんじゃないかな、っていう様に思いました。

ついつい我々は良かれと思って、いい事ばっかり言うんですけども。はい、以上です。どうもありがとうございました。

一同：（拍手）

青木：稽古堂の所長、堀金様、よろしくお願いします。

堀金（稽古堂所長）：皆さん、お疲れ様でした。実は私も大学生の息子と、それから、今年就職したばかりの娘がおりまして、この話聞いて改めてこれから自分達の子供の将来も考えるような機会にもなりました。

やはりあの、働くことという事は、生き方をどう考えるのかという事と非常に関わってくるんじゃないかなと思っております。でやはり、働く事、生き方っていうのは、やはり身近な人からこう、いろいろと感じることが非常に多いと思いますので、生き方とか働き方に魅力を感じる人に出会う事が非常に重要だと思っています。

これから若い方、大学行ったり社会に出ていく中で、やはりそういった様々な出会いをして頂きたいなと思っております。そのためには、やはり大学行っていろんな人に会う事も大事なので、我々稽古堂の方でぜひ勉強して頂きまして…。

一同：(笑)

堀金：…それで、学んで、また会津に帰ってきたいなという風に思うようになって頂ければありがたいと思います。今日はご苦労様でした。

一同：（拍手）

成田（地域教育コーディネーター）：時間が過ぎてしまいましたので、短く話したいと思います。今日は５人の皆さんから、本当に貴重なお話を聞いて、私も大変勉強になりました。若い時に聞いていれば、もっと立派な人間になれたと思っております。

一同：(笑)

成田：私もいろんな仕事をやりました。藤井さんが言っていましたが、芸能人と近づきたい。それを実践しました。その後、さっさと稼いでという事で、塾を開きました。それで、人生楽しくやろう、そして自

分の特技で頑張ってみようというという事で、先生になりました。そして退職して、今、人生楽しくやろうという事で、生涯学習、所長さんとか、荒井君とか、南雲君と非常に頑張っております。

皆さん、高校生のみなさん頑張ってください。優秀な人材を、求めております。そのために、今、学んでください。そして、佐野さんが言ったんですが、聞くことが大切だ。まさにそうだと思います。学ぶことの中には、聞くことが一番大事だとこう言っていますので、聞くことによって学ぶ。今日、まさにその学習が出来たのではないかなと思っております。

５人の皆様、大変ご苦労様でした。貴重な一日だったと思います。どうもありがとうございます。

一同：（拍手）

青木：これを持ちまして、今日のプログラムをすべて終了いたします。拍手で締めたいと思います、ありがとうございました。

一同：（拍手）